

説教 『裏切りの近さ、そこにこそ愛』 山本 護牧師
聖書 創世記 29：35／マタイ福音書 26：20～25

十二使徒の一人イスカリオテのユダは、イエスを銀 30 枚で売った(マタイ 26:14~15)。直弟子として出家するほどの者が、月給程度の金が欲しくて師を売り渡すとは、不可解。もしかすると些細な目論見が大事件になってしまったのか。これを「神の御計画」だとするなら、ユダのどこに責任があるのか。十字架は不測の結果だったのか。神は、御子をも殺す人間の罪を含めて、これを赦し給うのか。

「イスカリオテ」とは「カリオテの人」といった意味でエルサレムの近く。ユダはガリラヤの朴訥な弟子たちとは随分違うタイプだった。「ユダ」とは部族名でもあり、イスラエル本流の部族。父祖ヤコブの第四子としてその名の謂が示されている。「レアはまた身ごもって男の子を産み、〔今度こそ主をほめたたえ(ヤダ)よう〕と言った。そこで、その子をユダと名付けた(創世 29:35)。「ユダ」とは「主を讃美する」栄光ある名。主を讃える、イスラエル本流の、直弟子が「キリストを売り渡す」。

過越の夕食時、イエスは「わたしと一緒に手で鉢に食べ物を浸した者が、わたしを裏切る(マタイ 26:23)」と告げた。日本人が一つの鍋を各々の箸でつつくように、彼の人らはイチジクや苦菜を酢で和え、そのソースを一つの鉢に入れ、各々が手を伸ばしパンを浸して食べる。このように心許して共に食べる仲間が、真面目な信仰者が、到底ありえないと思える者が「キリストを売り渡す」のである。

「はっきり言うておく(26:21)」とは重要な事柄を述べる際の定式だが、こう注意を促してからイエスは厳かに語る。「あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている(26:21)」。弟子たちは狼狽して「〔主よ、まさかわたしのことでは〕と代わる代わる言い始めた(26:22)」。しばらく後にペトロや弟子たちは、「決してそんなことはありません(26:35)」と言い張るが、一連の応答に人間の信念の脆さが現れている。「まさかわたしのことでは」とは、ユダと他の弟子が同質であることを語っている。

福音書は、私たち末席のキリスト者に対して、「お前さんも一人のユダなのだよ」と静かに迫る。共に「鉢に食べ物を浸す(26:23)」ほど、イエスは親密な方だ。だから私たちはしっかり自覚したい。キリストが親しく接して下さる私たち自身が「裏切る」者だ、ということ。そもそも敵対者の悪意は「裏切り」とは言わない。愛を受けている人間の揺り戻しによって、イエスは十字架に引っ張られる。

「人の子は、聖書に書いてある通りに、去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。生まれなかった方が、その者のためによかった(26:24)」。神の御子イエスが、まさしく人間であったことの葛藤がここに現れている。「人の子は去って行く」という神の定めに対する従順さと共に、「人の子を裏切るその者は不幸だ」という呻き声が、同じ「人の子」に響いている。「生まれなかった方がよかった」とは怨み事ではない。ユダが負った苦しみ(27:3~5)を憐れに思う、悲しみではないのか。

捕縛されるその時、イエスはユダに語りかける。「友よ、しようとしていることをするがよい(26:50)」。ユダの「先生、こんばんは(26:49)」という接吻には底意があるが、イエスの「友よ」は変わらない親愛の情を表している。このコントラスト。それにしても、イエスの、神の、なんという愛であろうか。

【おまけのひとこと】

ユダは貧乏籤を引いた 裏切を引き受けたがための不名誉 使徒たちの霧散は後の宣教で帳消しにされた 気の毒なユダ あの時も 後世でも 唾棄される キリストは「友よ」と呼びかけるが